



松本竣介《青の風景》1940年、油彩・カンヴァスボード、23.5×33.0cm

ことば 144

絵でも深い翳ができるためには、どんなにたくさんのことを考え想はなければならないか。

(松本竣介「日記」から1940年2月13日)

今号の『ガス燈』では、大川美術館のコレクションによる展覧会を開催いただいた碧南市藤井達吉現代美術館の大長悠子氏、アサヒグループ大山崎山荘美術館の森田明子氏のお二人に寄稿をお願いしました。ここに改めまして謝意を表します。

「松本竣介《街》と昭和モダン」展を振り返って

大長 悠子

日本の近代美術史に燦然ときらめく一等星、松本竣介の輝きを一層強く感じた夏であった。松本竣介《街》は大川美術館のコレクションを代表する1点である。普段は常設展示されているため、この作品を同館以外で見られる機会は多くない。碧南市藤井達吉現代美術館で昨夏開催した「松本竣介《街》と昭和モダン—糖業協会と大川美術館のコレクションによる—」展（会期：2024年7月20日～9月8日）は、この《街》を展覧会の起点としたものである。大川美術館の田中淳館長による企画で、「昭和モダン」をテーマに公益社団法人糖業協会と大川美術館の両コレクションから選りすぐった日本の近代洋画140点を一堂に会した。5章からなる構成は、第1章「自然をながめる」で風景画を、第2章「テーブルの上の物語」で静物画を、第3章「松本竣介」で街とモダンガールを、第4章「人の形」で人物画を、第5章「まだ見ていない『かたち』」で抽象画を取り上げており、主題によって章立てが



碧南市藤井達吉現代美術館

なされている。展覧会の趣旨については本展図録の田中館長による巻頭文に詳しいが、ここでは開催館担当として実際の展示状況や来場者の反応に触れながら本展の内容を振り返ることとしたい。

まず冒頭の第1、2章では主に糖業協会のコレクションが並んだ。オフィスに飾ることを目的に収集された作品は、穏やかなものや華やかなものが多く、サイズ感もよく似ている。そのため、ともすれば展示室の壁面が風景画や静物画の単調な連続ともなってしまうかねない。しかし、章内でさらにモチーフに着目してセクションを分け、景勝を描いたものや身近な庭の草木を捉えた作品などの背景を昭和史に照らし合わせて紐解くことで、「昭和の風景画」、「昭和の静物画」に対して来場者に新たな視点を与えていたのではないかと思う。藤島武二、梅原龍三郎、里見勝蔵など官展の巨匠から在野の雄まで、洋画史を彩る錚錚たる顔ぶれに、来場者からは「思いがけず有名な画家たちの優品を多く見ること



松本竣介の《街》と《黒いコート》展示風景

ができて幸運だった」という声もいただいた。

本展のハイライトとなるのが第3章「松本竣介」で、その軸となるのが1938年に描かれた《街》である。野田英夫やドイツの社会諷刺画家ジョージ・グロスの影響が指摘されるように、青を基調としたこの作品の画面には、ピンク色のワンピースを着た女性や彼女を取り囲む街並み、人々など、それぞれのモチーフがモンタージュの手法によって大小様々に重なり合って表現されている。特筆すべきは、幻想的で洗練された「都会」のイメージとともに、街を包む微妙な不安感までもが、青く澄んだ皮膜に覆われるように画面に留まっていることである。人々の西洋的な文化への憧れと戦争を目前に控えたあの暗い雰囲気が共存するところに、本展がテーマとする「昭和モダン」が象徴されている。愛知県でこの作品を見られるとあって来場された方も多く、作品の前で長い間立ち止まって鑑賞される方も目立っていた。展覧会の構成としては、《街》に描かれた都市とモダンガールそれぞれに着目してセクションを分け、竣介と他作家の作品をあわせて紹介している。しかしながら、当館の展示では注目度の高い竣介作品をまとめて見せるため、竣介による《婦人像A》や女性の素描も《街》と並べて展示した。これについては賛否両論あったが、概ね好評だったようである。また本展開幕直後、個人所蔵家のご厚意により竣介の《黒いコート》の特別出品が決まり、会期中の8月8日より公開が叶った。この油彩による女性像は、もう一つの注目作として新聞にも取り上げられ大いに話題となった。このほかにも、モダンガールのセクションでは糖業協会所蔵の安井曾太郎《女と犬》や東郷青児《羊飼》などの人気作が揃い、来場者の目を楽しませていた。

展示の後半は大川美術館のコレクションが中心となる。第4章は、戦中戦後の人物表現の変化を



第4章 展示風景

巧みに捉えた作品構成が際立っていた。清水登之による戦死した息子の肖像画や浜田知明の版画など、戦争の影響を直接的に感じさせる作品は、昭和をたどる上で来場者にとって特に関心の高いものであり、反響が大きかった。さらに最終章では、難波田龍起をはじめ竣介と交友のあった同世代画家らの戦後の抽象的な作品によって「昭和モダン」後の表現の広がりを示し、来場者に鑑賞後の余韻を残していたと感じる。

本展は、昭和前期の日本の洋画を、その時代や社会の文脈において並列し見つめることで、この時代の洋画表現の豊かさや奥深さを十分に感じさせるものであったと思う。そして、その中心に据えた《街》をはじめとした竣介作品が有する時代性と、色褪せない魅力を改めて知らしめる機会となったのではないだろうか。末筆ながら、大川美術館創設者でありコレクターとしての大川栄二氏の審美眼に敬意を表するとともに、展覧会の企画から開催まで全面的にご協力いただいた大川美術館の皆様、糖業協会及び関係各位に、心より御礼申し上げます。

(碧南市藤井達吉現代美術館 学芸員)

山荘と松本竣介作品との邂逅

森田 明子

アサヒグループ大山崎山荘美術館では、2023年に大川美術館で開催された「生誕 110 年記念 松本竣介デッサン 50」（以下「デッサン 50」と記す）展の出品作による展覧会「松本竣介 街と人 - 冴えた視線で描く -」を2025年1月4日から4月6日まで開催した。岩手で育ち、東京で活動した竣介の個展が関西で開催されるのはまれで、おそらく2002年に大阪府枚方市の市立枚方市民ギャラリー（2021年閉館）において開催された展覧会以来のことと思われる（枚方での展示は、現在大川美術館の館長を務めておられる田中淳氏のご尽力によるものと聞き及んでいる）。

当館の本館（大山崎山荘）は、関西の実業家・加賀正太郎が大正から昭和にかけて建設した洋館を復元整備し、美術館として活用しているものである。山荘が政財界人をはじめ多くのゲストで賑わった時期は、竣介の活動時期とかさなる。東京と京都、東西の違いはあれど、同時代の空気感を



本館展示 導入部分

まとった竣介の作品は建物にしっかりと馴染んでいた。このような機会を与えてくださった大川美術館に心から感謝申しあげたい。

今回の展示会は、本館1階と「夢の箱」（山手館）とよばれる安藤忠雄氏設計による約94㎡のコンクリート造りの展示室を会場とした。展示空間は大川美術館に比してかなり狭いうえ、登録有形文化財である本館は展示の制約が多い。大川美術館での「デッサン50」展と同じように展示することは望むべくもなく、大川美術館が構成された第1章から6章までの章立てはのこしながらも、順序は変更し、一部作品の展示替え（デッサン8点）も行った。

大川美術館は竣介の没後70年・開館30周年を記念し、いずれも「松本竣介」を冠した「アトリエの時間」「読書の時間」「子どもの時間」「街歩き的时间」というシリーズの展示会を2018年から2019年にかけて開催、図録も刊行された。さら

に生誕110年にあたる2023年に「デッサン50」を開催、と大きなスケールで竣介に向き合われた。対して当館では、本展1本において松本竣介という画家を紹介しなければならなかった。そのため章解説は新たに書かせていただき、できるだけコンパクトに竣介の生きた時代、人物像を伝えるよう努め、文才に富む竣介自身の文章を引用してキャッチコピーのように用いた。

竣介は、文章を書くことは人に伝えるためというよりも自己形成のために重要であり、絵も同様だ*と語っている。竣介の著述がまとめられた書籍*を通読して感じたのは、絵画だけでなく文章も竣介の表現の場であったということである。とりもなおさずそれは彼の読書量や思考力によるものであり、知識や思考は作品制作にもいかされている。竣介自身が「デッサンがあって形の創造される処に画家としての仕事がある」*と述べたように、「デッサン50」というタイトルが、デッサンがすべての源であることをふまえたものであることは想像に難くない。しかし展示会名はあえて変えさせていただいた。当館で竣介を紹介できる貴重な機会である今回の展示が、単に「デッサン展」ととらえられてしまうことを懸念したためである。「冴えた視線で描く」というサブタイトルは、舟越保武が竣介の死に寄せて「類なく冴えた画家だった」**と評した言葉からイメージした。純粹で、理知的で、常に冷静に社会と対峙し



本館展示 6章

た竣介をあらゆる言葉としてもっともふさわしいと思ったからである。

岩手の中学校で同級だった舟越は、竣介についていくつかの文章をのこしているが、いずれも深い友情が込められている。「澄み切った詩情」「都会の哀愁」**と、竣介の作品を評するとともに、「水晶のような男だった」**とその早すぎる死を惜しんだ。1948年に竣介が没した時、葬儀に出られなかったのは、疎開先の岩手からの旅費が工面できなかつたためだったと舟越は述懐している。その後遺作展で竣介の絶筆に直面した舟越は、描かれた建物の暗い扉の向こうに竣介が行ってしまった、と感じたという。今回展覧会の締めくくりに、大川美術館が所蔵する、竣介の絶筆のひとつである《建物（青）》と舟越のブロンズ彫刻をならべ、同じケース内に展示したのは、そんな彼らのエピソードを伝えたいという願いからだった。

最終章「構図」は、すべて戦後の作品である。次男の落書きに着想を得た作品など、暗い時代をようやく乗り越え、新しい表現に挑戦していたことがよく伝わってくる。しかし無情にも1948年、竣介は36歳という短い生涯を終えた。戦時下、戦後の厳しい環境がその死に影響していることは明らかであろう。1941年、雑誌『みづゑ』に投稿した「生きてゐる画家」のなかで竣介は、50年、100年先を見据え、世界に冠たる文化を誇る国家となるために、画家も日々刻苦していることを訴えている。だがそこに10年、20年の空白が生じればそれは難しいであろうと憂えた。戦後80年を迎える今、果たして竣介の視線の先にあった未来は訪れているのだろうか。

（アサヒグループ大山崎山荘美術館 学芸員）

* 松本竣介『人間風景 新装増補版』中央公論美術出版 1990年

** 『舟越保武全随筆集』 求龍堂 2012年



「夢の箱」2～5章

展覧会報告

移動大川美術館展

「物語をえがくー文学と版画の世界ー」

大谷 明子

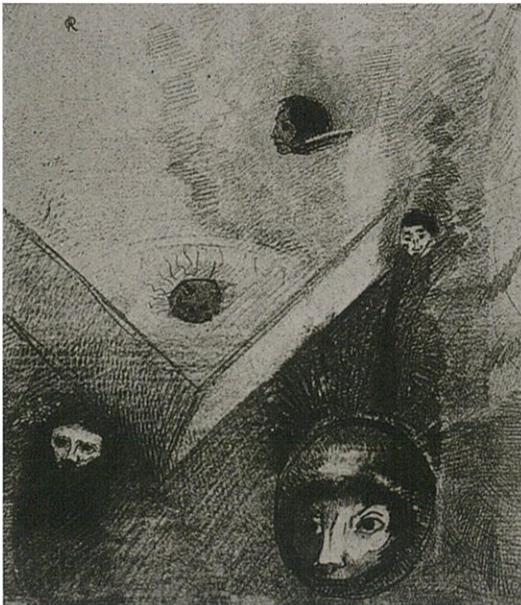
大川美術館では公益財団法人桐生市スポーツ文化事業団との共催でバリアフリーな桐生市市民文化会館の展示室にて毎年一回コレクションによる「移動大川美術館展」を開催している。今回は第35回移動大川美術館展「物語をえがくー文学と版画の世界ー」（2025年3月1日（土）～7日（金））を開催した。文学と美術には深い歴史があるが、ここではその一端として「画家と文学」をテーマに、世紀末から20世紀にかけての当館の西洋コレクションからオディロン・ルドンをはじめ、藤田嗣治、マルク・シャガール、アントニ・クラベ、ベン・シャーンンの版画作品70点を紹介した。19世紀末から20世紀前半にかけて、ヨーロッパでは版画技術の発展と画商や出版者が豪華本を企画したことなどを背景に、多くの画家たちが挿絵本を制作した。挿絵の仕事のほか、画家にとって文学作品は、創作の転機や座右の書、また文学者との交友などさまざまな関係が背後にある。そうしたサイドストーリーにも注目したいと考えた。本稿では、出品作の中から5点の版画集を取り上げて紹介し、展覧会の概要を記す展覧会報告としたい。

会期中には、展示室での解説会に加えて、関連イベントとして文化会館アトリウムにてピアニスト池邊啓一郎氏によるミニコンサート「物語をかなでるー文学とピアノ曲ー」（3月6日（木））を開催した。展覧会にあわせて文学をテーマにプログラムを構成、解説をはさんで演奏いただいた。出品作でもある『悪の華』『テンペスト』に関連する2曲を盛り込み、展示室につづく空間がドラマティックな響きでつつまれた。文学から美術、音楽とひろがる作品世界を重奏的に味わう機会となった。

文学を通じた画家と友人の関係

オディロン・ルドン（1840-1916）は、黒の不可思議な作品や神秘的な色彩あふれる作品で広く知られるフランスの19世紀末の画家だが、青年期にパリに出るもアカデミックな美術教育

になじめず故郷のボルドーに戻る。その時、ルドンより年長の植物学者アルマン・クラヴォー(1828-1890)と出会う。彼はルドンに科学と文学のてほどきをし、文学や哲学に親しむことをすすめ、精神世界の内奥の探求へと向かうルドンのよき理解者となった。フランス近代詩の傑作であるシャルル・ボードレール(1821-1867)の『悪の華』はクラヴォーとルドンの交友が始まったのと同時期の1857年に刊行され、近代生活の憂鬱と絶望、退廃の美と反逆の情熱を謳った詩集である。後世では傑作と認められているが、発表当時、批判と賞賛の嵐を巻き起こした。これをクラヴォーは刊行後すぐにルドンに読むようにすすめている。後年の1890年にルドンは依頼を受けて本作の版画のための9点のデッサンを制作するが、奇しくも同年クラヴォーはボルドーで自ら命を絶ってしまう。本を愛し、詩才にも富む読書家となったルドンと知的な友人との時間を感じる作品である。本作は表紙と章末の挿絵をのぞいた7点に詩の一部の引用が当てられ、テキストとの関係はゆるやかながら、物思いにふける横顔、浮遊する目の大きな顔、墮天使、顔のある花など、ルドンのエッセンスがちりばめられてる。



オディロン・ルドン《『悪の華』わが夜な夜なの 暗やみの背景に 神は巧みなる指先もて 途切れることなきさまざまの悪夢を描く》1890年



藤田嗣治、オディロン・ルドン 展示風景

挿絵の仕事

1913年にフランスに渡った藤田嗣治(1886-1968)は、独自の画風を模索し続け、1919年、サロンドートンヌに入選の快挙を成し遂げる。1920年代には多くの本の仕事に取り組むが、1890年初版の『中毒に就いて』における豪華版(1928年)もそのひとつである。作者のジュール・ボワシエール(1863-1897)は1886年にフランス領インドシナ(現在のベトナム、ラオス、カンボジア周辺)に赴き現地で没した著述家である。阿片を扱った文学作品の中でも、本作はとりわけ東洋の生活文化を描写しているのが特徴であり、パリで活躍する東洋人画家の藤田はうってつけの人物として本作の依頼がきたと考えられる。本の仕事における藤田は器用にもテキストに応じてさまざまに絵のスタイルを変えている。本作でもテキストを読み、研究を重ねた上で仕事に取り組んでおり、東洋的イメージの漂う世界観をみごとに描き出した画面に仕上げている。画家としての作品とはまた異なる挿絵の仕事として、藤田の巧みさがうかがえよう。

文学者との交友

帝政ロシア領ヴィテブスク(現ベラルーシ)に敬虔なユダヤ教徒の家に生まれたマルク・シャガール(1887-1985)は、フランスで画家としての成功をおさめた。アンドレ・マルロー(1901-1976)はノーベル文学賞受賞者、対ナチスレジスタンスの英雄、シャルル・ド・ゴール政府文化大臣であるが、シャガールとは旧来の友人で、マルローの著作『反回想録』『そして地上では…』の2作品の挿絵をシャガールが手掛けている。またマルローがフランスの文化大臣時代には、パリのオペラ座の天井画制作をシャガールに依頼して

いる。今回展示した『そして地上では…』(1977年)は、マルローがスペイン内戦で共和国側としてフランコやファシスト、ナチスの同盟軍と戦った経験を綴った未発表の文章に基づく小説である。晩年に昔のノート類を整理していた折、1939年の草稿を偶然見つけ、35年以上もの間忘れられていた草稿に興味を抱いたマルローが、新たに第三部を付け加えて完成したのがこの作品であるという。マルローは原稿をシャガールの元に送った手紙で、「忠実な挿画を考えてはいけないように思われます。そうではなくて、私のテキストが台本となるような楽譜を考えていただきたいのです。*」と伝えていたが、マルローの予想に反し、シャガールはテキストに忠実に描いたようである。完成した版画試し刷りを見たマルローは、大判の、飛行機が街の上空を飛ぶ情景が、第三部後半において空を飛ぶ鳥に変えて描かれた画面に感嘆している。画家と文学者の信頼にもとづくあたたかな関係性がうかがえる作品である。

創作の転機

スペインのカタルーニャに生まれたアントニ・クラベ(1913-2005)は、スペイン内戦後フランスに逃れ1940年代後半から多くの本の石版画挿絵

を手がけていた。『ガルガンチュア物語』(1951-55年)は1950年に挿絵制作に取り掛かり、長い制作期間を費やして完成した。全59点の石版画はクラベ最後の大型の挿絵版画である。作品はフランス・ルネサンス期の人文主義者フランソワ・ラブレール(1494?-1553)が著した、ガルガンチュア、パンタグリユエルという巨人の一族を巡る物語である。中世ヨーロッパの騎士道物語の体裁にしたがって、ガルガンチュアが育ち、活躍する姿が描かれながら、下品で破天荒なストーリーが怒涛の勢いで語られていく。因習に凝り固まった修道士や教師たちの滑稽さが描かれる一方で、ガルガンチュアたちは自由に人生を楽しみ痛快な活躍を見せる。クラベの挿絵は各章のはじめには飾り文字が配置されるなど全体にも中世風に統一し、装飾的に仕上げている。面白おかしい下品さよりも中世モチーフへの画家の関心がうかがえる。本作の仕事を終えたクラベは、以降「中世」のモチーフを自身の作品に取り入れ、「王様」「王妃」「戦士」などのシリーズは彼を代表する作品群となっていく。大川美術館は油彩と立体を含めクラベの作品を所蔵しており、当館の創設者で初代館長大川栄二はクラベの迫力ある画面の「スペインの情熱と色彩」



展示風景

に魅了されたというが、画家のモチーフの転機となった本作は当館らしいコレクションのひとつといえる。

画家の座右の書

同じく、創設者が蒐集した大川美術館の西洋絵画コレクションにおける重要な作家にベン・シャーン（1898-1969）がいる。シャーンはリトアニアのユダヤ系の家庭に生まれ、アメリカに移住。10代から石版画工房に徒弟に出て働きながら学び、1930年代からは社会派の画家として活躍した。それに先立つ青年期の28歳頃、パリのセーヌ川の川岸の本屋で一冊の本『マルテの手記』（1910年）に出会う。プラハ出身のドイツ語詩人ライナー・マリア・リルケ（1875-1926）によるこの長編小説は、パリに住む青年マルテに託して、パリでの孤独な生活の中、愛や死、芸術についてのリルケの思索が綴られる。シャーンは、この小説を生涯の座右の書とし、70代にさしかかった、死の1年前に小説の一部を抜き出してタイトルとし、版画集《一行の詩のためには…：リルケ「マルテの手記」より》（1968年）を制作する。引用された一節は、青年マルテが未だ何も成し遂げられない葛藤のなか語られる「詩は感情ではない、経験である」に始まる部分。リルケへのオマージュ、そしてシャーン自身の人生を振り返るように、全24点には選び抜かれたモチーフ、震える描線や繊細な画面が展開し、徒弟時代を経て磨かれた石版画技法をもってして制作された、晩年の珠玉の作品である。「人は一生かかって、しかもでき

れば70年あるいは80年かかって、まず蜂のように蜜と意味を集めねばならぬ。そうしてやっと最後に、おそらくわずか十行の立派な詩が書けるだろう。」**と作中に語られるように、まさに70歳を目前にしたベン・シャーンが本作を制作したことは、この文学作品と画家との関係の深さを感じずにはいられない。

むすびにかえて

挿絵、版画集はページを捲るように、展示室で複数の画面が連なって場面が展開し、個性的な画家たちが描いた物語の世界に包まれるようであった。さらに本展で紹介したのは、美術と文学の深淵なる影響関係ではなく、むしろ画家と文学の関係であった。読書を通じた友人との時間や挿絵の仕事の姿勢、画家が感銘を受けて生涯大切にしていた小説など、文学と出会った画家たちの物語が浮かび上がり、作品を通してパラレルなドラマを感じていただけたのであれば幸いです。

（当館学芸員）

*「そして地上では、1976」シャガール展（サン＝ポール＝ド＝ヴァンス、マーク財団、1977年4月2日-5月31日）『アンドレ・マルローとフランス画壇の12人の巨匠たち』図録、出光美術館、1998年。

**ライナー・マリア・リルケ、大山定一訳『マルテの手記』白水社、1953年。

次回展覧会のご案内

大川美術館リニューアル記念展

「エコール・ド・パリの画家たちと松本竣介」

2025年4月26日（土）～6月22日（日）

リニューアルした大川美術館において、当館コレクションのエコール・ド・パリ周辺の画家たちの作品を松本竣介の代表作とともにご覧いただけます。また、竣介が集めたエコール・ド・パリ関連の蔵書やスクラップブックもあわせて紹介します。

本展では、アメデオ・モディリアーニ《少女の肖像（ジャンヌ・ユゲット）》1918年作（アサヒグループ大山崎山荘美術館蔵）を特別出品します。



ベン・シャーン 展示風景